

## 「大いなるかな，エペソスのアルテミス」（1）メリ メ『イールのヴィーナス』をめぐって

森，茂太郎  
九州大学

<https://doi.org/10.15017/10038>

---

出版情報：Stella. 20, pp.33-40, 2001-09-10. Société de Langue et Littérature Françaises de  
l' Université du Kyushu

バージョン：

権利関係：



# 「大いなるかな， エペソスのアルテミス」(1)

— メリメ『イールのヴィーナス』をめぐって —

森 茂 太 郎

Si je l'aime, prends garde à toi!

—Habanera

「生れつき詩人の天分をそなえておいでの貴女には、物事を信じるために私がどれだけ苦勞するか、とうていお分りいただけぬと存じます。それに、自分の好むものと真実と見なすものとのあいだに大きな隔りがあるなどということも。私は幽霊や仙女の姿を想像するのが好きですし、心のなかで幽霊譚を自分に向って語り聞かせ、身の毛のよだつ思いをすることもあるのです。ですが、きわめて現実的な恐怖を味わうにもかかわらず、だからといって幽霊の实在を信じる気にはなれません。この点に関する私の不信ときたら相当なもので、かりに幽霊を見たところで、自分の眼を信じはしないでしょう<sup>1)</sup>。

1856年11月23日、ド・ラ・ロシュジャクラン夫人に宛ててメリメがしたためた手紙の一節を引用した後、『フランス幻想文学史』のマルセル・シュネデルは次のように付け加えている——「メリメの不信は不安に根ざしたものである。自分を魅了し怖れさせる存在、すなわち不可視のもの、超自然的なもの、神的なものを前にして、おのが心の平安を保とうとして疑ってかかるのである<sup>2)</sup>」と。このようにシュネデルがメリメのかぶった懷疑家の「仮面<sup>3)</sup>」の背後に漠たる不安に怯える作家の素顔を想定せざるをえないのは、いやしくも幻想小説の作家たるもの、「神秘なものや彼方の世界<sup>4)</sup>」への関心を持ち合せていないわけがないという牢固として抜きがたい信念があるからである。なるほど、第2帝政時代の社交界の花形でウジェニー皇后の側近でもあったメリメは、彼自身つねづね公言していた通りの「無神論者」であったかもしれない。が、それにもかかわらずメリメは、「名を持たず、確たる実体も理念も持たず、宗教でもなければ礼拝の対象にもなりえぬ何ものかの存在<sup>5)</sup>」を信じて

いた。いかにとりとめのないものではあれ、こうした「信仰」こそがメリメを急かして、「数々の幻想小説、その他にも読者の不安をかきたてるような文章を一生たえまなく書かした<sup>6)</sup>」とシュネデールは言うのである。

メリメに宗教的ないし実存的不安がなかったとは言わない。だが幻想小説の作家であるためには、不可知の何ものかの実在を信じるのが本当に必要なのだろうか。たしかに『悪魔の恋』のカゾットは晩年マルチニズムに傾斜し、『死女の恋』のゴーチエははなはだしい迷信家であった<sup>7)</sup>。が、こうした彼らの「信仰」は、後世に遺された彼らの小説をもっぱら「恐怖と戦慄の探求」という観点から眺めるならば、そのインパクトをいちじるしく弱める結果に終わっているのである。なぜならカイヨワの指摘するように、幻想小説は「自然の法則が確固として不変のものと思なされている世界、懐疑心の旺盛な世界でのみその力を発揮するもの<sup>8)</sup>」であり、そうであってみれば、超自然的なものに対する作家の「信仰」は創作の邪魔になりこそすれ、「幻想小説特有の恐怖<sup>9)</sup>」を高めることには決して役立たないからである。幻想小説の本質が何よりもまず「恐怖との戯れ<sup>10)</sup>」にあるなら、幻想小説の作家であるために必要なのは「信仰」ではなくて「不信仰」なのだ。メリメの懐疑家の「仮面」はおそらく仮面ではない。メリメは懐疑家であるにもかかわらず幻想小説を書いたのではない。『シャルル 11 世の幻想』(1829 年)や『ロキス』(1869 年)など、優れた幻想小説をメリメが書き残すことができたのは、まさに彼が懐疑家であったため、「かりに幽霊を見たところで自分の眼を信じはしない」と明言するほどの徹底した懐疑家であったためである。作者みずから「会心の出来栄え<sup>11)</sup>」と自賛する『イールのヴィーナス』(1837 年)は、このような不信の徒にしてはじめて書くことのできた、フランスではめずらしい本格的怪談小説である<sup>12)</sup>。

## 1

この小説の「私」はバリの考古学者で、南仏旅行の途次、カタロニア出身の男を道案内にイールの町をめざす。ペロラードという名の在郷のアマチュア考古学者の屋敷を訪ね、古代や中世の遺跡が少なからず埋蔵されているというこの町の周辺を調査するためである。その道すがら、「私」はカタロニアの男から耳寄りな話を聞く。つい 2 週間ほど前、イールの町はずれで「偶像」[49]

が掘り出されたと言うのである。男の話では、それは「教会の鐘と同じほどの重さ」の古い像で、「地面の下かなり深いところ」に埋まっていた。異常な寒波で立ち枯れてしまったオリーブの古木を引き抜こうと仲間のジャン・コルという男がつるはしを振り下したところ、「まるで鐘でも撞いたような」[50] 金属性の音がした。不審に思ってなおも掘り下げて行くと、やがてのことに「真黒な手」が姿をあらわした。「地面から突き出た死人の手」をいやでも連想させるこの無気味な光景を目のあたりにしてカタロニアの男は慄え上がるが、彼らの主人であるペロラード氏はまるで「宝物」でも発見したように狂喜して叫ぶ——「古代ものだ、古代ものだ！」。

「それからたちまち自分でつるはしを使う、両手で掘るやらずで、汗水たらし、私ら二人分の仕事を一人でしてしまわれました」

まもなく全身をあらわしたのは「漆黒の肌」をした半裸の女神像である。興奮したペロラード氏が断言するところでは、「異教徒の偶像」であることは疑いないと言う。だがカタロニアの男の言葉を信じるなら、この女神は「邪悪」[51] である。異様なまでに美しいその顔立ちが男の眼に「邪悪」に映るからではない。また女神の「巨きな白い眼」が男を怯えさせるからでもない。女神像は現実に「邪悪」なのである。と言うのも、ようやく掘り出された女神像を三人がかりで地面に立たせようとしたとき、それはいきなり倒れて、ジャン・コルの脚を「添木」のようにへし折ったからである——

「かわいそうに、あの男の脚、まるで添木のようにたわいなく折れたんです！ ひどいもんです。それを見たとき、私はかっと頭に血がのぼりましてね、偶像を穴だらけにしてくれようとするはしを振り上げたんですが、ペロラードの旦那に止められました。ジャン・コルには金をやりなすったが、それ以来あの男は2週間も床についたきりですよ。医者はその脚ではもう二度と以前のように歩けないだろうと言っています。まったく惜しいもんです。足の速さじゃ町一番で、若旦那の次にポームの名人でしたからね」[52]

それからまもなく「私」はペロラード氏と対面する。氏は小柄で快活な老人で、「学者の無関心が打ち棄ててかえりみない忘却の淵」[53] から郷土を救いだそうという使命感に燃えている。氏の主張するところによると、「わがル

ション地方」には「フェニキア、ケルト、ローマ、アラビア、ビザンツの記念物」[55] があったところに埋蔵されていると言う。しかし食卓の話題は、主人のもったいぶった口調にもかかわらず、ごく自然につい先ごろ掘り出されたばかりの女神像のことになる。女神発掘の噂がすでに「私」の耳にまで達していることを知ると、ペロラード氏は大げさに驚いて言う——「これははしたり！ 偶像のことをもう耳にされましたか。何しろ連中は私のヴィーナスのことを偶像、偶像と言うものでしてね」[56]。

無知な民衆が「偶像」と言うとき、そこにはもちろん蔑みの心と、それにもまして恐怖と禁忌の感情が籠められている。だがペロラード氏が同じ「偶像」という言葉を口にすると、そこに侮蔑的な意味合いは微塵もない。「あなたの偶像」[57] と夫人に揶揄されるように、氏にとって「偶像」は文字通り崇敬の対象なのだ。「偶像」に首ったけのペロラード氏には、明後日に迫った一人息子の結婚すら「つまらぬこと bagatelle」[55] にすぎない。氏の見るところ、発掘された女神像はヴィーナスをかたどったもので、それも伝説の名匠ミロの子孫の手になると推測される「傑作」[57] なのである。この「傑作」という言葉を聞き咎めた夫人が横合いから口を出す——「傑作、傑作！ ほんとにとんだ傑作をやらかしましたよ、あなたのヴィーナスは！ 人の脚を折るなんてね！」。夫人の辛辣な皮肉に対してペロラード氏はただちにこうやり返す——

「いいかね、奥さんや」と、ペロラード氏は断乎たる調子で、絹の色糸で織った靴下に包まれた右脚を夫人に向かって突き出しながら言った。「たとえ私のヴィーナスがこの脚をへし折ったところで、悔みはせぬぞ」

夫人に向かって挑発的に突き出されたこの「右脚」に、ほかならぬファルススの象徴をみることはおそらく許されるであろう。さらに氏がウェルギリウスを引用して「汝はヴィーナスの贈物も知らぬな」[58] と言うとき、氏は「ヴィーナスの贈物」が妻による「贈物」とは似ても似つかぬもの、すなわち、ファルススを媒介として得ることのできる享楽とは比較を絶したものであることを漠然と予感している。だがもしペロラード氏の予感が正しく、「ヴィーナスの贈物」がファルススによる享楽のはるか彼方にあるものなら、この「贈物」を手に入れるためには、人はファルススを失わなければならない。ヴィーナスに「傷」を負

わされ、フェルスを剥奪されなければならない。ペロラード氏にとって、だから「脚をへし折」られることは災いではなくて幸いなのだ。できることなら氏は、片脚を失くしたジャン・コルの幸運にあやかりたいとさえ願っている。何かと言えはすぐ古典の知識をひけらかしたがるペロラード氏は、「ヴィーナスの恋人」であるためには、火の神ウォルカヌスのように「足萎え」[66]でなければならないことをもちろん知っているからである。

ヴィーナスに愛されるにはまずフェルスを失わなければならない。しかしフェルスを失くした者すべてがヴィーナスに愛されるわけではない。それなら、わが意に反して「ヴィーナスの恋人」にされてしまったジャン・コルはどのような男であったろうか。すでに見たように、彼は「足の速さは町一番」で、ポームの腕前はペロラード氏の子息に次ぐと言う。つまりヴィーナスに愛されるのは衆に抜きんでた技と体力の持ち主、おのれの若々しいフェルスを誇りうる者だけなのだ。年老いて村夫子然としたペロラード氏が「ヴィーナスの恋人」にふさわしくないのは一目瞭然であろう。それなら女神の寵愛を受けるに値するような男が果して一座のうちにいるであろうか。——いる。ペロラード氏の一人息子、ポームの腕前にかけては右に出る者がないと噂されるアルフォンスである——

両親がしきりに往ったり来たりしているのとは対照的に、アルフォンス・ド・ペロラードはテルムの神さながら身動きひとつしなかった。今年26になる背の高い若者で、美しく端正な顔だちをしているが、表情には乏しかった。この若者の身の丈といい、スポーツマンらしい体つきといい、疲れを知らぬポームの名手という町の評判を充分に裏書きしていた。その夜の立ちは粋を凝らしたもので、「流行雑誌」の最新号の口絵をそっくり敷き写しにしたものであった。だがこの若者には、その流行の衣裳はいかにも窮屈そうであった。ピロードのカラーをつけて杭のように固くなっており、振り向くときは体ごと振り向いた。陽に焼けた巨きな両手と短く切った爪は衣裳と奇妙な対照を形づくっていた。それはダンディの衣裳の袖から覗いている農夫の手であった。[53-54]

これが最初の夜、「私」の眼に映じたアルフォンスの姿である。が、この肖像のいったいどこに「ヴィーナスの恋人」にふさわしい美点が認められるであろうか。流行の衣裳に身を包んで即製のダンディよろしくめかしこんで座っているアルフォンス、「ラテン語よりもたしかにフランス語のほうをよく解する」

[58] と「私」に皮肉られる粗野で無教養なこの男のいったいどこに、われわれの女神を惹きつけるに足る魅力がひそんでいるのだろうか。たしかに彼は評判通りの「ポームの名手」かもしれない。だが女神に愛されるためには、「スポーツマン」であり「ポームの名手」であるだけで果して充分なのであるか。

われわれは、ここに描き出されたアルフォンスの肖像を額面通りにうけとる必要はない。この小説の一人称単数に割り振られているのはたしかに報告者の役割だが、しかしこのことは、「私」の観察が常に公正中立であり、そこにはいかなる偏向も認められないということの意味しない。言いかえればこの小説の「私」は、近代小説が理想とするガラスのように透明な主体ではない。一例を挙げれば、語り手を歓待するペロラード家の人びとに対する「私」の態度には、田舎者に対する都会人の、無教養な人間に対する教養人のあからさまな軽侮が認められる。つまり「私」の描く現実、それがどれほど主観を交えぬ生のままの現実のように見えようと、報告者自身にも意識されることのないファンタスムによって色濃く染め上げられているのだ。

こうした観察の歪みをただすには、「私」によるアルフォンスの多分に戯画的な肖像を少しばかり角度を変えて見るだけでいい。つまり、身につかぬ衣裳を着用におよんでしゃちほこばっているアルフォンスに田舎者のスノップを見るのではなく、それとは反対に、窮屈な衣裳のなかでいごちの悪い思いをしている純朴な若者を見ればいいのだ。「ダンディの衣裳の袖から覗いている」陽に焼けた手に「農夫の手」を見るのではなく、たくましい野性児の無骨な手を見ればそれでいいのだ。そのときわれわれの眼に映じるのは、都会の教養ある人士を悩ませる世紀病とはおよそ無縁な、潑刺とした生命力にみちあふれた若者である。「私」はアルフォンスが未来の花嫁の「美しい瞳」より「持参金」に心を奪われているらしいのを見てショックをうける [72]。しかしロマンティックなところは少しもないこの野育ちの若者に、「私」が夢想しているような清純な愛を求めるのはお門違いであろう。アルフォンスは馬を愛するように女を愛する。われわれはこの若者のうちに、「私」の底意地の悪い観察によって歪められた滑稽なダンディのできそこないを見るべきではなく、文明に抑圧された野性を見るべきなのだ。彼がまとった薄っぺらな文明の表皮の下には猛々しい野性児が、「サビーヌを掠奪する」[82] ローマの戦士がひそんでい

る。『文化という不快』のフロイトが言うように、「人間の心的活動においては過去の存続という現象が稀有な例外というよりむしろ原則」<sup>13)</sup> であるとするなら、アタヴィスム（先祖返り）はいつでも可能である。アルフォンスの都会的な衣裳はかりそめのものにすぎず、固苦しい衣裳の下では、荒々しい古代の魂が華美な布地を食い破って今にも現れ出ようと身悶えているのだ。

「私」の悪意がもち来らした歪みをぬぐい去って虚心に見るならば<sup>14)</sup>、身につかぬダンディの衣裳を脱ぎ捨てて姿を現そうとしているのはアルフォンスの野性の魂、彼の心の奥深く埋もれた古代の魂である。ところでわれわれの女神もまた大地の奥深く、文明の折り重なった地層の深みから掘り出されはしなかったであろうか。そう思ってみるなら、「私」に描かれたアルフォンスの姿は、その「身動きひとつしない」様子といい、「表情に乏しい」ところといい、どこかあの女神像を思わせはしないだろうか。そればかりではない。「杭のように固くなった」アルフォンスが「振り向くときは体ごと振り向いた」と揶揄されるとき、実はアルフォンスはファルスではないだろうか。怒張したファルスそのものではないだろうか。たしかにアルフォンスもまたひとりの男である以上、父親やジャン・コルと同じくファルスを持つ。がそれとともに、いやそれにもまして、アルフォンスは彼自身がファルスなのだ。すでにわれわれが見たように、女神に愛されるためにはファルスを失わなければならない。しかしファルスを失うのが実はファルスになるため、ファルスとして女神の欠落を埋めるためだとしたら、ファルスを持ちながらすでにファルスであるアルフォンスにもまして「ヴィーナスの恋人」にふさわしい男がどうか。

ペロラード氏が妻の猛反対を押しきり、アルフォンスの婚礼の日どりをキリスト教では不吉とされる金曜日に、まさしくこの日が「ヴィーナスの日」[75]に当るからという理由で定めたとき、実は氏はそのことを察知していたのではあるまいか。そして「私」がアルフォンスの不動の様をローマの境界神にたとえたとき、「私」もまたどこかでそれに感じていたのではないだろうか。アルフォンスはたしかに境界にいる、文明と自然、象徴と現実、生と死が境を接するあのあやうい地点に<sup>15)</sup>——。

(以下次号)



## 註

- 1) Cité par Marcel SCHNEIDER, *La Littérature fantastique en France*, Paris: Fayard, 1964, p. 239.
- 2) *Ibid.*, p. 240.
- 3) *Ibid.*, p. 231.
- 4) *Ibid.*, p. 232.
- 5) *Idem.*
- 6) *Idem.*
- 7) 拙稿「駱駝, 悪魔, 女——カゾット『恋する悪魔』考」, 『ステラ』第17号, 九州大学フランス語フランス文学研究会, 1998年6月, 111-112頁, 註23; 「倒錯の岸辺——ゴーチエ『死女の恋』をめぐる」, 同第18号, 1999年6月, 130頁, 註30を参照。
- 8) Roger CAILLOIS, «Images, images...», in *Obliques*, Paris: Stock, 1975, p. 31.
- 9) *Idem.*
- 10) *Ibid.*, p. 22.
- 11) Cité par Pierre-Georges CASTEX, *Le Conte fantastique en France*, Paris: José Corti, 1951, p. 269.
- 12) Prosper MÉRIMÉE, *La Venus d'Ille. Colomba. Mateo Falcone*. Édition présentée et établie par Patrick BERTHIER, Paris: Gallimard, coll. «Folio», 1999. 本文中の [ ] 内は頁数。ただし同一頁が連続する場合は省略した。訳出にあたり, 杉捷夫編訳「ヴィーナスの殺人」(『メリメ怪奇小説選』, 岩波文庫, 1986年)を参照した。
- 13) Sigmund FREUD, *Le Malaise dans la culture*, Paris: PUF, coll. «Quadrige», 1998, p. 13.
- 14) この「悪意」がそもそも何に由来するものであるかについては, いずれ詳細に述べる機会があろう。
- 15) Voir Jacques LACAN, «La Chose freudienne», in *Écrits*, Paris: Éd. du Seuil, 1966, p. 412.